

第139回 三方限古典塾（'18, 5, 17）

呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その12）

- 1 人を怒じよするに六つ有り。或いは彼の識見ある、到らざる処あらん。或いは彼の聴聞、未だ真しんならざる処あらん。或いは彼の力量、及ばざる処あらん。或いは心事、苦しむ処あらん。或いは彼の精神ゆるが、恕じよせにする処あらん。或いは彼の微意びい、在る所の処あらん。
此の六恕を先にし、而して之に命ずれども従わず、これに教うれども改めずして、然る後に罪すべきなるのみ。ここを以て君子は人に教えて而る後に人を攻め、人を体して而る後に人を怒る。
(人情) 230

(意識) 相手に思い遣りを示すときに、配慮すべきことが六つある。

- ① 彼の見識が到らなかったのではないか。② 彼が見聞したことが現実とずれていたのではないか。③ 彼の力量が足りなかったのではないか。④ 何か心に悩みがあったのではないか。⑤ 心にゆるみがあったのではないか。⑥ 何か別の考えがあったのではないか。

この六つの思い遣りを優先させて示し、それでも命ずることを聞かず、教えても改めない時に初めて罰する。智者はこのようにして、相手を責める前に教えることや、怒る前に相手を理解することを優先させるのである。

(余説) 人の上に立つ者、人を教え導く立場にある者の基本的な心構えです。ここでの「恕」は、自分を思うのと同じように相手を思い遣ることです。論語・衛霊公 24 には、人が生涯行うべきものとして「それ恕か。己の欲せざる所は人に施す勿れ」とあります。

しかし、考え方は人それぞれですから、思い遣りのつもりでやったことが「大きなお世話」になることもあり、他人の身になって考えることはなかなか難しいものです。

- 2 釘を入れるには、唯ただ其かたの堅かたからざらんことを恐る。釘を抜くには、唯ただ其いの出いでざらんことを恐る。鎖くさりを下くだすには、唯ただ其けんの嚴けんならざらんことを恐る。鎖くさりを開ひらくくには、唯ただ其やすの易やすからざらんことを恐る。
(物理) 232

(意識) 釘を打ち込む時には、堅く打ち込まれなくてすぐに抜けやしないかと心配し、釘を抜く際には、こんどはなかなか抜けないのではないかと心配する。

鎖の鍵をかけ閉める時には、鍵が嚴重でないのではないかと心配し、鍵を開ける時には容易に開かないのではないかと心配する。

(余説) この章で著者は、本来何を言おうとしているのでしょうか。これについて、中国哲学史の疋田啓佑は、「(人の心は) 誠に身勝手なもので理屈に合わないのである」と否定的に書いています。一方、中国古典の訳著が多数ある守屋 洋は「立場が変われば考えも変わるものだ」と肯定的です。

立場が変わると、果たすべき義務や得られる権利が変わります。また見えるものや聞こえるものも感じ方も変わります。俗に「立場が人をつくる」と言いますので、「立場が変われば考えも変わる」のは当然のことなのでしょう。一方、立場が変わっても見方が変わらない人は「すでに能力の限界に近い」という見方もあるようです。

子どもから親になった時、生徒から教師になった時、医者が患者になった時、読者が作家になった時、定年退職後に再雇用された時など立場が逆転した時に、どのように感じてどのような振る舞いができるか、まさに識見・度量が問われるところです。

3 患難かんなんの時を以って心は安楽あんらくに居り、貧賤ひんせんの時を以って心は富貴ふきに居り、屈曲くつきよくの時を以って心は广大くわんくわうに居れば、則ち往くとして泰然たいぜんたらざるはなし。
淵谷えんこくを以って康莊こうそうに視べ、疾病しつびょうを以って強健きやうけんに視べ、不測ふそくを以って無事むじに視べれば、則ち往くとして安穩あんゑんならざるはなし。
(人情) 226

(意識) 厳しい困難にぶつかった時でも、心はゆったりと落ち着いている。貧しく苦しい時でも、心は満ち足りている。逆境に突き落とされた時でも、心は晴れ晴れとしている。こうであれば、どんな境遇に陥っても、泰然と構えていることができるであろう。

深く狭い谷底に身を置いていても、四方八方に通じる大道を歩んでいる気持になる。病気になっても、健康でいる時の気持でいられる。不測の事態に直面しても、何ごともないかのような気持になれる。こうであれば、例えどんな事件が起きようとも、安らかで穏やかに対処することができるであろう。

(余説) 患難かんなんは艱難かんなんと同じような意味です。患も艱も、憂える・困難で辛いという意味で、艱難かんなん辛苦しんくのように用います。また「艱難、汝を玉にす」ですが、本来は英語で「Adversity makes men wise」だそうです。(Adversity: 患難・艱難、wise: 賢明・聡明)

本文の趣旨は一応は理解できますが、それを己の心境や行動に実現できるかとなると、すぐに落ち込む私の場合、はなはだ心許ない感じです。しかし、この言葉を心に刻んでいるかいなかで、いざという時に何か少しは異なってくるのかも知れません。

(参考) 佐藤一斎・言志晩録 205「艱難かんなんは能く人の心こころを堅かたうす。故に共に艱難かんなんを経し者は、
交わりを結ぶまたも亦密つひにして、竟に相忘るる能わず」
西郷隆盛・漢詩集 62「幾歴辛酸志始堅」(幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し)
呻吟語・修身「貧羞ひんしゆうずるに足らず。羞かたじけなくすべきは貧にして志なきなり」
「大事、難事には担当たにとうを看る。逆境、順境きんどうには襟度みを看る」

4 水の千流万派は、一源せんげんに始まる。木の千枝万葉は、一本いっぴんに出ず。人の千酬万応せんしゆうは一心いっしんに発す。身の千病万症は一臟いっしやくに根ざす。千万せんまんに眩するは、举世こころざしの大迷なり。直ちよくに原頭げんとうを指すは、智者の独見なり。故に病は一を治めて千万皆除かれ、政は一を理おさめて千万皆挙がる。
(広喩) 232

(意識) 川は多くの支流から成り立っているが、元は一つの水源地から発している。木は多くの枝葉から成り立っているが、元は一本の幹から生じている。人間は社会の中で様々な対応を迫られるが、いつも一つの心から出てくる。体は諸々の病気や症状を現すが、元は一つの臓器から発している。

枝葉末節のさまざまな姿げんわくに眩惑されるのは、世の人に常にある迷いである。だが、智者はずばり本質に切り込む。だから病気は一ヶ所を治療しただけで諸々の症状が消え、政治も一つの問題を処理しただけで諸々の問題が解決するのである。

(余説) 物事の枝葉末節に囚われるのではなく、本質を捉えて解決することが大切です。現代の社会で起きている問題も、その本質を問う必要があります。薩摩藩士で英国留学生に選抜、戊辰戦争や五稜郭陥落に貢献、北海道開拓使でサッポロビール前身の設立に尽力した村橋久成は、郷土の先輩のスクヤンダルに絶望して潔く辞任した後、僧の姿で全国を転々し、11年後に神戸の路上で行き倒れで発見された、その彼の生き方にヒントが見られます。それは、平生から培われた清廉・正義に潔く殉じられる心意気です。